

〔講演〕

「新渡戸稲造と聖書」^{*}

佐藤全弘[†]

ニトベ・フレンズセミナーが始まりましたのは二〇〇五年四月からです。私は二〇〇六年三月までの一年間は、月に一度、計十回盛岡にまいりました。この時にさんさ踊りを初めて見たのです。今日は奇しくも同じ時期に盛岡を訪れることになり、さんさ踊りを再び見ることができそうですので楽しみにしております。

今年は、プロテストメントが日本に開教されて百五十年に当たります。明治学院を創設したヘボンが初めて日本の土を踏んだのが一八五九年。それから今年で百五十年になります。東京では四、五日間にわたり、大きなホテルを借り切つて大勢の人が集まり、大講演会やシンポジウムが開かれています。

大阪では去年九月から六回にわたつて百五十年記念ということで、次の三つのバンドをめぐつて私が講師となり、聖書と訳や賛美歌のことも話しました。新渡戸稲造が学んだ札幌農学校の札幌バンド（札幌のクリスチャンの群れの意味）、

^{*} 本稿は、二〇〇九（平成二十一）年八月三日（午後一時半―三時半）、岩手県産業会館七階六号会議室にて開催されたニトベ・フレンズセミナー（四季会）夏のセミナーにおける講演原稿である。四国学院大学文化学会の依頼により掲載許可をいただいた。なお、講演記録は、佐藤みさ子様による。〔編集者注〕

[†] SATO, Masahiro 大阪市立大学名誉教授

九州熊本で産声を上げた熊本バンド、ヘボンが関わり、多くの宣教師がいました東京横浜の横浜バンドです。この三つのバンドが日本のプロテスタントの草分けとなり、多くの人材を輩出しました。

ヘボンが来る十三年前にユダヤ人ベッテルハイムが沖縄に宣教のために来て、聖書を琉球語に翻訳しました。しかし、日本本土に初めて開教されたのは百五十年前です。

新渡戸稲造はクエーカーですが、クエーカーはずっと後の一八八五（明治十八）年にコサンドが来日して初めて日本に布教しました。今日は、プロテスタント日本開教百五十年に因んで「新渡戸稲造と聖書」のテーマでお話したいと思います。

一、はじめて聖書にふれる ― 東京英語学校在学中（一八七六年）

明治天皇東北巡幸の際の下賜金の一部、二円で英文聖書を

新渡戸稲造が初めて聖書に触れたのは、東京へ出て東京英語学校に在学中の一八七六年、十四歳の時です。一冊二円の英語の聖書を買いました。

明治九年当時聖書は、まだ日本語に翻訳されていませんでした。新約聖書が一冊の聖書として翻訳されたのは一八八〇（明治十三）年四月のことです。旧約聖書も翻訳されて両方が一冊になったのが一八八八（明治二十）年です。

当時の二円は、現在の価値に置き換えると二万円位です。当時の小学校教諭の初任給は五円から七円だったことを考えますと、聖書は高価なものだったことが分かります。

このお金は明治天皇からの御下賜金でした。一八七六（明治九）年に、明治天皇は東北を巡幸しました。西南戦争が予想され九州に軍隊を派遣するかもしれないときに、明治政府は、幕末に最後まで官軍に楯ついて幕府に忠節を尽くした南部藩が反乱を起こさないようにし、安心して戦えるようにしたいと考えたからです。

十六歳で天皇になり、二十四、五歳になっている明治天皇は自らは物事を判断できませんから、明治政府を樹立した

大久保等が、天皇に東北、北海道を巡幸することを勧めました。行く先々の篤農家やその地域の開発に努力した人たちに金一封を授け、政府の威信を高めようと思いました。

新渡戸稲造の祖父と父親が開拓した青森の三本木の新渡戸邸に天皇が宿泊され、お礼に金一封を下賜されたのです。およそ五十円位だったようですが、稲造の母親と兄が相談して、一族の者たちに分け与えることにしました。稲造は数え年十五歳ですから、それ程多くはなく二円貰うことになったのです。

新渡戸稲造は東京で勉強中、養子になった太田家からは小遣いは毎月二十銭貰っていました。一銭でせんべいが百枚買える時代ですから、二十銭は結構な額です。天皇の御下賜金であり、記念になる大事なものを買うようにという母の手紙が添えられてありましたので、英語の聖書を買いました。その後、大切に使っていました。新渡戸稲造の遺品の中には残っていません。

新渡戸稲造は聖書を買う以前からキリスト教については関心を持っていました。当時の英語のテキストは西洋人が書いた立派な文章をそのまま学びましたから、テキストに聖書の文が度々出てきます。ですから新渡戸は英文学を勉強するなら聖書を抜きにしてはできないということを知っていました。

聖書を買った一八七六年、この年はアメリカ建国百周年で、フィラデルフィアで建国百年博覧会が開かれました。新渡戸が英語を習っていたM・M・スコットは、日本に師範学校を作るために来日していたアメリカの教育者ですが、彼が東京英語学校で英語を教えている生徒たちに文章を書かせて、その中の優秀な作品を一つ展覧会に送ることにしました。そこで新渡戸が書いた文章が一番良いということになり博覧会で展示されたのです。本文はどこにも残っていませんが、題名は「キリスト教を日本に導入する意義について」でした。十四歳の生徒でありながら、大学院生の修士論文になる位の題名です。ですから、聖書が珍しくて買ったというのではなく、既に聖書に関心もあり、ある程度の知識もあって買ったということが考えられます。

二、札幌農学校の生徒として——（一八七七年十月—一八八一年七月）

1. W. S. Clark（一八二六—一八八六）が一八七六年横浜で求めた英文聖書五十冊の一冊を入学時にもらう

新渡戸稲造は、聖書を買った翌年一八七七年に札幌農学校の第二期生として入学しました。当時、新学期は九月から始まって、翌年六月に終わり、七、八月は夏休みになっていました。大正八年までこの仕組みが続いています。小学校は今と同じでしたが、中等、高等学校は外国人の教師が多かったので、外国の仕組みに合わせたためです。

クラークは、自分が教育を奨める限りは聖書を踏まえて行いたいということで、横浜の洋書店で聖書を五十冊買い、札幌農学校の生徒に与えて毎週聖書の勉強をさせることにしました。

新渡戸も入学してその聖書をもらって勉強しましたが、何遍もあちこち持ち歩いて勉強しましたので、手元からは無くなってしまうました。

新渡戸稲造の令孫、加藤武子さんが保管している遺品の中に、新渡戸稲造が晩年一九三七（昭和七）年に、講演のため渡ったカナダで買った聖書があります。そのとびらに、「私がクラーク博士の残したのをもらった聖書とほとんど同じ型の聖書なので、これを買うことにした」と書いています。それで、どのような聖書だったのかが分かったわけです。それは余り大型でなく、黒表紙で、天が赤色のものです。展覧会で私はそれを見ました。

2. 学校では学年ごとに集会をもち、各々当番で聖書を講じた

聖書を使つてどのように学んだかと言いますと、アメリカ人の宣教師がついてきたわけではありません。クラークは化学の専門家で、鉱石の分析などをする先生です。その他一緒に赴任した先生たちも、農業土木、数学、測量学、土壌学など農業に関係する教科を踏まえていました。クリスチャンではありますが、聖書の専門家ではありません。当時の札幌の人口は三千人位でしたから、小さな村のような所でした。教会は一つも無く、宣教師は函館には来ていましたが、札幌には一人も来ていませんでした。

そのような所でしたから、クラークは毎週日曜日、生徒の前で自分が聖書を読み、日本語を知りませんでしたから英語で説教しました。クラークは賛美歌を上手に歌えませんでした。というよりも音痴だったようです。賛美歌は詩のうなものですから歌詞だけを朗誦。オルガンもありませんでしたから仕方がありませんでした。

クラークは学生だけで聖書を学ぶ会を作るように勧めましたので、一期生は毎週聖書を勉強していました。クラークがアメリカに帰国した後、一期生たちは二期生たちにそれを伝えました。二期生はキリスト教に皈依すると決意した者たちが聖書の勉強会を続け、卒業後札幌独立キリスト教会を創設し、現在も百三十年間続いています。

教会には、百三十年前に交わされた「イエスを信する者の契約」が額に入れて飾ってあります。これはコピーですが、本物は本部に保管しており、札幌市の文化財になっています。

新渡戸たちキリストを信じる者はここにサインしました。サインして抜けた者もありますが、抜けなかった八人が毎週集まって、賛美歌の詩を朗誦し、聖書の一部をとりあげて感想を述べるなどしていました。

その模様は、内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』（岩波文庫）に生き生きと描かれています。その中で、新渡戸稲造は当時太田姓でしたから「O」という頭文字で書かれています。八人は必ず討論の時間を設けていました。

日本では、討論の勉強を設けているところは小学校から大学まで未だかつてどこにもありません。国会議員も討論が下手です。正面からぶつかって議論をかみ合わせることはほとんどありません。下手な討論をしてやりこめると一生恨まれます。日本ではうっかり討論できません。しかし、アメリカでは討論します。討論のための討論ですからテーマをとらえて、自分の知識を整理し、いかに相手を説得するかという勉強です。

札幌農学校では討論をしました。キリストを信じる者八人が討論したのですが、信じる者と信じない者とに分かれて討論しました。テーマは「神の存在」という堅苦しいものでした。新渡戸稲造は不信者の側に立ちました。新渡戸は札幌農学校にクラークが持ってきた本のうち、文科系の英語の本を全部読んだといえますから相当知識を積んでいました。だからあのような眼鏡をかけるようになったのでしょう。

そこで、新渡戸稲造は「神の存在」ということについて、信じる側に立った高木玉太郎にたいして「神は全能である。では天地を創造した後に全能である神はなぜ自殺しなかったか」と質問しました。高木はそのような質問は初めて聞いたし、考えてみたこともない。しつこく質問攻めにされるので「そんなことを考えるやつは大バカものだ」と言いました。そこで新渡戸は「彼は僕のことを大バカ者と言った。これではやつとは討論できない。僕は退席する」と言つて部屋から出ていきました。それ以来、討論すると喧嘩になるからもう止めようということになったのですが、いかにも日本人らしいことです。

新渡戸は当時、すぐ喧嘩ごしになる短気者でした。「修養」という本の中の「怒気抑制法」に、どうして怒りを抑えるかということを書いています。現在の世の中も腹立たしいことがたくさんありますから、これを読むと随分参考になると思います。

この時、新渡戸が出した問題は、アウグスティヌスが著書の中で述べている「神はなぜ自殺しなかったか」をとりあげたものです。ですから農学校の生徒が返答できないのも無理はありません。新渡戸も討論するからには相手が困るような難問を出してやろうと考えて、図書館に行つて調べてきたに違いありません。このようにして聖書を読んでお互いに考えを述べ、聖書を深く勉強しました。

英語の聖書をしつかり読みましたから、英語の勉強にもなりました。自ずから聖書の文体が身に染み付いていますから、手紙を書くにしても、一言書くとき直ぐに関連して聖書の文言が頭に浮かびます。

(財)新渡戸基金から出版している『新渡戸稲造研究』に、宮部金吾が新渡戸宛に出した手紙を、私が翻訳して入れています。本邦未公開のもので、北大の図書館に現物があるものをコピーでもらいました。

私はその手紙を訳しながら思いました。宮部金吾は日本の植物学の草分けです。新渡戸のように後々英語の文章をたくさん書いた人ではありません。若い時にお互いが英語で手紙をやりとりしていましたが、宮部の手紙は随所に聖書の文言が出てくるのです。ということは宮部も頭の中に英語の聖書がたくさん詰まっていたということです。ですから札幌農学校での聖書の勉強は生半可なものではなかったと言つて良いでしょう。

リンカーン大統領は小学校しか出ておらず、独学で勉強しましたが、聖書を一生懸命読みました。彼が最も多く読んだページは聖書です。ですからリンカーン大統領の演説は、聖書の響きが随所に出てきます。それは非常にリズムが良く、人々の心の中にも聖書のことばが入っていますから、アピールする力があるのです。

日本の政治家は直ぐ金のことを口にしたり、人の悪口を言ったりするので人を感動させないし、活字になどできそうにありませんが、その点、札幌農学校では実に良い教育をしたと思います。

新渡戸稲造は札幌農学校を卒業して開拓使に勤めましたが、開拓使は明治十四年の汚職に関連した政変で廃止になりました。明治になって政府が税金を出し十年がかりでビール工場、紡績工場、開拓、材木工場、鉄道などを造って北海道を開拓したものを、民間に払い下げる時に、開拓使長官黒田清隆が、政府のしかるべき機関を通さず岩崎という者に、投入した金額の十分の一で払い下げることに決めました。税金を投入した時よりも物価が上がっているのですから、もっと上げなければならぬはずですが、しかも二十年間無利子分割払いにしたのですから、ただでくれてやると同じことです。それに対して参議の大隈重信が新聞にすっぱ抜いて猛反対したため、払下げは行われませんでした。

同時に開拓使も潰すことにし、北海道も政府の直属機関にすることにしました。そこで開拓使に勤めていた者が職を失いました。そのため札幌農学校卒業後五年間勤務する義務がなくなり新渡戸や内村は東京に出ることになります。ほとんどの卒業生が札幌を離れました。

三、アメリカでクエーカーとなる――（二八八六年十二月九日、ボルチモア友会会員となる）

新渡戸稲造は東京大学に一時いましたが、東京大学が学力のレベルが低いのは生徒もだが先生はもっと低い。授業ではアメリカ帰りの先生も英語の本をただ読んでいるだけ。しかも、その本は先生だけが持っている。生徒の中では殿様の息子一人が同じ本を持っているだけで、みんなはそれを借りて写すだけである。だからこのような所に居ても無駄だということ、アメリカに留学しました。

アメリカの東部、ボルチモアに行き、Society of Friends (キリスト友会) の会員として認められました。新渡戸は一生キリスト友会で信仰を貫きました。

クエーカーの聖書観—George Fox (一六二四—九一) が一六四六年、〈内なる光〉に接して始めた一派

キリスト友会はクエーカー (Quaker) と呼ばれます。「Quake」は震えること。そこでQuakerとは「震えん坊」という意味です。ジョージ・フォックスが裁判にかけられた時、霊感があつて震えたので、裁判長が「おまえはQuaker (震えん坊) だ」と言ったのが、そう呼ばれるきっかけになりました。

フォックスは一六四六年に初めて〈内なる光〉に接しました。彼が二十二歳の時です。若い頃から宗教に熱心で、霊的な素質が豊富な人であつたことは間違いありません。

彼は、村で機を織っている裕福な家に育ち、成長してから隣り村の靴屋に奉公しました。彼が生まれた一六二四年は、イギリスでは宗教改革が一応落ち着いていましたが、様々な派がいくつもでき、混乱している状態でした。フォックスはその中で、大事なものは〈内なる光〉であり、牧師や神父を通さずに神から一人一人に直接照射されていると言っています。〈内なる光〉は今のキリスト教の言葉では「聖霊」となるでしょう。

フォックスは、聖書は尊いが、聖書の文字よりも聖霊の方が尊い。文字を正しく読み、聖書をどれほど勉強しても、これが決定版で、これ以外の回答は無いというものは存在せず、数学の正解のようなものは無いと言っています。色々な見方もあるし、色々な言い回しもできる。誤解して読んでいてもその人の生き方にプラスになればそれで良い。したがって、フォックスの考え方は、聖霊の働きによつて聖書を理解することができ、聖霊の助けなくしては聖書を理解することはできないというものです。これは当時の他のキリスト教会の考え方とは全然違います。だからクエーカーはどこへ行つても迫害されました。

このような歴史と特徴を持つ正統なクエーカーがアメリカに移り、そこに新渡戸稲造が身を置いたのです。

新渡戸稲造も内村鑑三も同じ時期にアメリカのクエーカーの人たちの世話になりました。内村も強く影響を受けまし

たので、クエーカー的なものの考え方が相当染みついています。内村の考えでは、聖書は一冊の本ではなく三書であるというものです。

一つは聖書です。文字に印刷されている神の御心。二番目は天然です。天然を理解するためには自然科学が必要。三番目は人間です。人間を理解するためには歴史が必要。そこで聖書はこの三本足で立っている。聖書を理解しようと思つたら、天然を知らなければならぬ。太陽は地球の周りを回っていると思つていては今では聖書を理解できない。人間を深く理解しようと思うと歴史を学ばなければならない。聖書の中には偉い王様のことも出ている。聖書は、人間は全て罪びとであつて、悪いことをする欠点は皆持つているということを前提にして理解しなければならない。しかも、歴史の中に神の御心は徐々に実現されていくことが分かる。だから聖書は三書だというのが内村の考えです。

この考え方は、新渡戸たちクエーカーが言つてゐる聖霊によつて聖書が理解されるということと表裏になつてゐます。『人生雑感』は、新渡戸が唯一宗教について書いた文です。これは自分で筆を執つて書いたものではなく、新渡戸がクエーカーの集まりで話したことを、他の人が筆記し清書して、出版させてほしいというので出すことを許したものです。その中の「友会徒の生活」という章に次の文があります。

「宗教と云ふは坊さんが教ふるものでもない。又バイブルでも無い。經文でもないと云ふた。聖書に書いて無い信仰すべきものもある。自分の考に於て、善い事正しい事に愧づる事はないと思つたものは、聖書に書いてあつても無くても関はぬと、斯う云ふ事も言つた。其が為めに、ジョージ・フォックスは、非常に迫害を受けた。二〇世紀の今日、友会徒は基督教徒で無いと云ふ人がある。耶蘇教であるならば、耶蘇教はバイブルを貴ばねばならぬ。友会徒はバイブル以上に銘々の心を置から耶蘇教ではないといふて、友会徒を基督教信者の中に数へない人が、今日尚あるくらゐである。併し友会徒はバイブルを軽んずるものでない。けれどもバイブルで判断の付かぬ時は何方らにするか、自分の心に従ふか、バイブルの文字に従ふか、疑問の起つた時は、心の義しい所に従へと教へた」

(全集十卷二三頁以下)。

ジョージ・フォックスは生涯に七回投獄されました。新渡戸はジョージ・フォックスの考えを自分の言葉に直して説

明したのです。聖書は全ての事についての解答を含んでいるわけではありません。自然科学の教科書ではないのです。現在の天文学や宇宙のことは何も書かれてありません。信仰を教えるための本です。

先日、国会で臓器移植についての法律を混乱の中で通してしまいました。実際にけしからんことです。あの様な問題は、少なくとも四年間は議員を続けようとしている人たちがじっくり考え、もっと公聴会を開き、もっと時間をかけて決めるべきことです。臓器移植のことはバイブルには書いてありませんから、そのようなことは精神に従って考えれば良いというのが、新渡戸の言っていることです。

次は、英語の文章で「A Japanese View of Quakerism」から（拙訳）、

「彼ら「クエーカー」は聖書を神の霊を受けて書かれたものとみとめるが、それを神的意志の唯一の啓示と考えはしないであろう。クエーカーは言う、聖書は神の唯一絶対の言葉ではない、だから聖書を理解し聖書から益を得るには、聖書を精読するより前に、精神の開明がなければならぬ、と。／クエーカーの聖書観からいまい一つの結論が出る。クエーカーは言う、聖書をただ知っただけでは、真理を説く資格は得られない、真理は直かに霊から来るのだから、と。だからクエーカーは、神学の研究は、他の教会ほど重んじない」（全集十五卷三四三頁以下）。

これは新渡戸が国際連盟事務次長を辞めて帰る前にジュネーブ大学で英語で講演したものです。亡くなった後でメリー夫人が編集した本のなかに入っている名文です。

内村のところでも申し上げましたが、内村は聖書は三書であり、神のことを表わす三種の啓示がありました。神の御心は三つのものによって人間に示される。一つは聖書であり、一つは天然であり、一つは人間である。だからこの三種の一つを欠いても他の二つは分らない、と。

新渡戸はこの文章でフォックスを援護しながら、内村が言う事柄と重なることを言っています。

四、札幌農学校教授時代―（一八九一年三月―一八九八年三月）

1. 官舎自宅に有志学生を集め、一日十一・二十節を英・独・日語で批判的に研究。参加者十一・十七人

新渡戸はアメリカ、ドイツで学び、一八九一年三月に札幌農学校の教授になつて帰り、一八九八年までの七年間母校に勤めています。

新渡戸稲造は勤めると大抵七年で仕事を変えています。精神科の先生の話によると新渡戸は一種の神経衰弱で、躁鬱病であつたと言いますが、高揚する時と憂鬱になる時は誰でもあるので、どこまでが病氣なのかは医師の主観によると思います。

この七年間、札幌農学校の学生たちに聖書を教えました。授業ではなく、有志の学生を家に呼んで、一日に十節から二十節、つまり一章の四分の一から五分の一位と、少しづつ教えました。東京女子大が出版した『新渡戸稲造研究』に、メリー夫人の弟ジョゼフ・エルキントンに宛てた手紙がたくさんありますが、その四五八頁にそのことが載っています。稲造からジョゼフ・エルキントン宛手紙（一八九一年八月二十二日付）。

「すでにご存じと思いますが、キリスト教徒でない少数の学生たちが聖書の研究のためにこの家に来ています。普通十人くらい出席しますが、今日は十七人でした。彼らは主として大学の一年生で、二十才から二十五才の年齢です。彼らは聖書を一緒に読みまた研究したいと言うので、私は喜んでその要求を容れ、すぐ始めました。毎日曜日に集まることにしています。今までに私共は『ヤコブ』書と『ヨハネによる手紙』を読みました。次の日曜日から『マタイによる福音書』を始めます。／私たちの研究は批判的であつて、非常に丁寧に読むので、一度にせいぜい十節から二十節くらいが限度です。ギリシャ語のわかる者が一人もいませんので、他のいろいろの訳本を使って比較研究しています。私の書齋にノイス訳とバアブの改訂版、日本語訳、それに三種類のドイツ語訳もあります。私たちは聖書講演から提供される諸問題の論議に毎回二時間あまりを費やしています」（『新渡戸稲造研究』四五八頁）。

大学一年生で二十才から二十五才とありますが、札幌農学校初期の時代は、年齢に幅があり、一期生の頃はもつと幅がありました。

ノイス訳とバアブの改定訳は英訳です。日本語訳とありますが、先程言いましたように、一八八八（明治二十一年）には旧約新約が一冊になった日本語訳が出ています。

この手紙から分かることは、一つは、新渡戸の家に自発的に集まり、聖書を研究させてほしいという有志の学生を集めて、毎週研究会を開いていたということです。

2. まずヤコブ書、次にヨハネ書簡、そしてマタイ福音書

この手紙から分かるもう一つは、新約聖書を取り上げた順序です。まずヤコブ書を学び、次にヨハネの手紙を学び、そしてまたマタイ福音書に入るとするのは、偶然に選んだのではなく、新渡戸は考えて順序を決めています。

ヤコブ書は非常に短い手紙ですが、ヤコブは義人ヤコブと呼ばれイエスの弟と言われる人です。彼は兄イエスに従う気はなく、むしろひやかしていましたが、イエスが十字架にかかり復活し昇天してからヤコブのもとに現れ、そこで、やはり兄は神の子であつたと信じるに至り、やがて殉教者の第一号になるのです。ですから、イエスの弟でありながら、初めは疑い、しかしイエスの死後、信仰を起し殉教した人です。

ヤコブ書は、パウロとは違い、むしろ行いが大事だということを強調しています。ですから、いかに信じていると言っても、行いが悪ければ、その信仰はなにの足しにもならないということです。当時の札幌農学校の生徒たちは大体儒教の教育を受けてきています。儒教はこの世の道徳を貴ぶという教えですから、ヤコブ書から入口を開こうというのが新渡戸の考えだったろうと思います。

次にヨハネ書簡一から三です。これはイエスの弟子のヨハネの手紙と考えて良いでしょう。「最後の晩餐」の絵で、イエスの隣に座ってイエスにもたれかかっている若い青年がヨハネです。

この頃、あの青年は実は女性だ、イエスの恋人だと勝手なことを言う人がいますが、それはもつてのほかです。「最

後の晩餐」には女性は一人も入っていません。それははっきりしています。現代の人は、大昔のことだから言いたい放題で、それを言ったり書いたりすると一時期だけ売れますので、それを狙う人がいるのです。

ヨハネが書いているのですが、自分のことをヨハネとは一切言っておらず「主に愛された弟子」と言っています。そのヨハネの手紙は「愛」が中心です。その愛は実行的爱です。兄弟を愛さない者は神を愛していることにはならない。神を信じているならば、兄弟を愛さなければならぬということです。キリスト教は神を愛することが中心ですが、それはこの世にいる人たちを愛するというのと一つである。そこに先程のヤコブ書と繋がりを持ちながら学ぶことができる訳です。

神は私たちを愛してください、そのために独り子のイエス・キリストを与えて下さり、そして命を救って下さったのだ。神がそうして下さった以上、私たちも行いと誠とをもってお互いに愛し合わなければならないというのが、ヨハネの手紙の主旨です。

これは若い青年たちに教えるのに相応しく、ヤコブ書の次にヨハネの手紙を選んだというのは意義があります。次にマタイの福音書です。マタイ福音書は初めの方に山上の垂訓があります。

モーセ契約の律法では、例えば、「人を殺すな」と書いてある。しかし、私は言う。人を憎む者は人を殺すのと同じだとイエスは言うのです。あるいは、モーセの十戒に「姦淫してはならない」という言葉がある。しかしながら新しい契約では、イエスは欲情を抱いて女性を見るものは心のうちで姦淫を犯しているということです。つまり、イエスの道徳の教えは、大変厳しいので、モーセ契約の十戒どころではない。おそらくそれを完全に守り通せる人は、人間として一人も居ないだろうと思われる程です。

「人を殺してはいけない」とある。しかし、私は言う。右の頬を打たれば、左の頬を向けよ」とイエスは教えます。これは先程のヤコブの実行を重んじる、行いを通して愛を表わすということです。マタイ福音書は、イエス・キリストがこの世において実行されたように、ほとんど実行不可能と思える程の愛に生き、敵を愛し、神に導かれて初めてできるような行いをするのが大事だということを教えています。この点からも新渡戸が青年たちに教えた順序は、なかなか

か良く考えられていると思います。

五、『武士道』における聖書引用（旧約二十四、新約二十九）

出所を文中に示したのは一か所だけ

私が翻訳して出版した『武士道』には、索引を付けました。その中に「聖書」という項目を設けて、旧約聖書と新約聖書の、新渡戸がそれを引用しているところ、あるいはそれを含めて述べているところを全部チェックアップしました。その結果、旧約聖書は二十四か所、新約聖書は二十九か所、両方合わせると五十三か所引用されています。

しかし、この部分は聖書のどこにあるかを明確に書いてあるのは一か所だけです。後は新渡戸の文章の中に埋まっております、自分の文の一つになっています。あるいは少しほのめかしているものもあります。いずれにしても、聖書をたくさん引用しています。

ということとは『武士道』は、聖書を教えるものではなく、英語で書きながらも「武士道」に関することが出てきますと、若い時に一所懸命読んだ英語の聖書の言葉がそこに必ず浮かんたのです。それを自分の文章に織り込んで述べているわけです。

シェークスピアの言葉も十二か所に織り込まれてあり、老子は四か所、孔子は八か所ありますが、聖書とは関係ありません。

例えば、引用されていることを明記してあるのは一か所だけです。「武士道の影響」の二二二頁。「創造主自身が甘い香りをかいで、その心に新しい決意を固められたと記されているくらいだから」とあります。これは桜の花は移ろいやすい浅い香りだけれども、朝日を浴びて咲き匂っている。旧約聖書のエホバの神が喜ぶ香りとは焼肉の匂いです。焼肉屋の前を通れば神様は鼻をひくつかせるに違いない。だから甘い香りを嗅いで、心に新しい決意を固められたというのが、創世紀八章二十一節と、引用を明記しています。新しい決意とは、ノアの洪水のあと、ノアが生贄に捧げた焼肉の

香りが天に立ち昇り、神はその香りを嗅いで喜び、そしてもはや二度と人類を滅ぼすということとはしないと決意されたという記録がありますが、そのことを言っているのです。

文章の中に既に埋め込まれていて、チラッと触れているだけのところもあります。一例をあげますと二二七頁から二二八頁の名誉について論じているところです。キリスト教宣教師たちが明治日本の形成に大いに貢献したという人もいますが、まだまだその名誉を宣教師たちに与えるわけにはいかないと、新渡戸は明治三十三年、『武士道』の中で言っているのです。

「私は当然名誉を与えるべき人には喜んで名誉を与えたく思うが、この名誉はまだほとんど善良なる宣教師たちに与えるわけにはいかない」。この「名誉を与えるべき人には喜んで名誉を与えたく思う」というのが、聖書の言葉を踏まえての表現です。聖書ではパウロがローマの信徒へ送った手紙の十二章十節に「互いに名誉を他に帰すように」という、聖書の命令」という言葉が出てきます。

このように新渡戸は『武士道』の中にふんだんに聖書を盛り込みました。そのことが『武士道』が西洋人に、殊にイギリス人、アメリカ人に非常に気に入られたという一つの理由でもあります。また、違った文化の中に伝達しようと思えば、相手方の文化の中で用いられている文脈を使って表現するということは非常に大事なことです。こちらの考えをこちらで分かる言葉だけで言っても相手に通じないわけです。相手の身になって考えるということを新渡戸は知っていたと思うのです。

六、東京女子大学「新渡戸文庫」の聖書・キリスト教書

1. 蔵書寄贈先は

- (1) 東京女子大学へ五千七百冊
- (2) 東大へアダム・スミス文庫

(3) 北大へ二千冊(農学・植民学)

(4) 十和田記念館へ和書

東京女子大学に新渡戸文庫がありますが、そこにキリスト教に関する書籍がたくさんあります。

新渡戸は子どもがおらず養子を迎えており、『武士道』を書く時に、アメリカに静養にいきましたが、その時に連れって行ったのが養子の孝夫^{よしお}です。まだ六歳位でしたが、それからずっと小学校から大学までアメリカの学校に入れました。ということは日本語ができないのです。大正の初めに、日本語を知らない人間がいくら高度な英語ができたとしても日本では雇って働いてもらおうという雇い主は居ないわけです。役人にもなれません。今なら逆に外務省あたりで雇うでしょう。

新渡戸は子どもの教育を間違いました。日本人として働かせるためには日本語をしっかりとしなければ駄目だということなのです。

新渡戸は多くの青年男女を教育し、それなりの効果を上げましたが、自分の養子の一人息子^{息子}の教育では大失敗しました。これは頭の方ではなく、道徳の方で失敗したのです。

そう考えると自分の子どもの教育は難しい。新渡戸のような大先生でも失敗したのですから、我々がなかなかうまくいかないのは当然です。

息子は英字新聞の会社に入って大活躍しました。当時、新渡戸稲造は背が高かったのですが、息子はそれ以上に背が高く、幅が良いので、レストランに入ったりすると、皆が驚くほど堂々たる風采だったのです。実際に見た品川力という出版社社長がそう言っています。

それから孝夫はタイプライターを機関銃のように速く打ったと言います。その反面、新渡戸はタイプライターを少ししか使えませんでした。メリー夫人が出産後、病気になるアメリカに帰る時に、新渡戸は付き添って渡米します。日本に帰る時に、メリー夫人の父親が当時の一番上等なタイプライターをプレゼントしました。新渡戸は日本に帰国してから、その父親に二度手紙を書く時だけ、そのタイプライターを使いました。使わないと申し訳ないと思ったのでしょうか。

新渡戸にお金を貸してくれたアダムズ先生に、なかなか返せずに詫び状を打ったのですが、タイプライターの字はタガタでした。新渡戸はこの三通にだけタイプライターを使っています。それ以後、タイプは一切使っていません。

孝夫はタイプを打てるのですが学問には関心がないので、書物はしかるべき所に寄付することにしました。十和田記念館へ日本語の本を生前に三千冊位寄付しました。十和田記念館では七、八年前に整理してカタログは作ったようですが、しっかりと管理するようなどころまでは整理できていないのではないかと思います。私は十年以上訪れていないのでよく分かりませんが、皆さん、見学した際には調べてみてください。

東大へ寄付したアダム・スミス文庫は、新渡戸が生前に寄贈することを全部決めていました。十八世紀の『国富論』を書いたアダム・スミスが持っていた本を全部、新渡戸がジュネーブ時代に買い取っていました。それをそのまま東大へ寄付したのです。今も東京大学にあります。これは歴史的にも非常に世界的な価値のある文庫です。しかし、冊数はそれほど多くはなく千冊位でしょう。

北海道大学へ約二千冊寄付しています。農学、植民学の本です。札幌農学校を卒業したのですから、やはり北大にそれに因んだ農政学、農業経済、植民政策等々の本を寄付することに決めていたのでしょう。同級生宮部金吾等が北大に勤務していましたので、新渡戸の没後、宮部が責任を持って寄付しました。今ではカタログもできています。内村鑑三の蔵書も北大に相当寄付され、北大図書館の書架が新渡戸と背中合わせに並んでいます。

それから一番たくさん寄付したのは東京女子大学です。殊に英語の書物はほとんど全部東京女子大に寄付されました。キリスト教関係のみならず、歴史、文学、伝記等五千七百点です。例えば十巻ものの全集なら全部で一点と数えますので、冊数で言えばもつと多くなります。ですから七千冊位になると思います。新渡戸が生きていた時に、女子大に少しづつ持っていた本が、一般の書庫の中に紛れ込んでいたものがありますが、それを全部ピックアップして新渡戸文庫として整理し、学問的に立派なカタログを作りました。キリスト教関係の本は三百五十九点、冊数で言えば四百二十五冊あります。

(一) 総論、教義 ― 百十八点

(二) 説教、典礼 — 五十点

(三) 教派、教会史、プロテスタント — 百十点

(四) 聖書 — 八十一點

総論 — 十二点

新約・旧約 — 十八点

旧約 — 二十八点

新約 — 二十三点

新渡戸が旅行にも持参し、毎日使っていた聖書もこの中に入っています。

内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』の初版本、明治二十八年出版の本、アメリカで出版され初版だけで絶版になった本『日本人の回心日記』という英文著書も入っています。

新渡戸はメリー夫人の助けもあつて英語の本がたくさんありましたが、それもずっと保存しておいて東京女子大に寄付しました。

ここでは何よりも多いのは英語の聖書です。一六一一年に出された欽定訳聖書はたくさんありますが、興味をひいたのは小型手帖本です。これは一八七〇年に出されました。ポケット用電卓位の大きさで、全部まとめて三十二冊にしています。聖書は六十六巻ありますから半分ぐらいの冊数になっています。マタイ伝は一つ、ルカ伝も一つです。活字は英字新聞の見出し位の大きな活字ですが、薄っぺらな携帯用です。小さな本に大きな活字ですから、当時、馬車の中でも読んで覚えるというための小型本です。新渡戸はこれをずっと愛用した形跡があります。

2. キリスト教書三百五十九点(四百二十五冊)中、聖書は英・独・仏・エスペラント訳、八十一點(百十二冊)

聖書の中には、イタリア語訳、フランス語訳、ルターのドイツ語訳も入っています。エスペラント語訳もあります。珍しいものではヘボン訳のローマ字日本語というものがあります。日本語を西洋人が読みやすいようにローマ字にして

一八八六年に出した聖書です。

教外典と言われる、聖書の中には入らなかったが、かなり古い時代に書かれたものの中のペテロ福音書が一つあります。

新渡戸は聖書に関しては八十一一点持っていました。随分たくさんさんの聖書を所有し活用していたことが分かります。

私も聖書はたくさん持っております。英語の聖書は二十七種類、ギリシャ語、ラテン語のものもあります。日本語の聖書は明治訳から始めて十七点持っています。全部合わせて四十七種類の聖書を持っております。

その点、新渡戸は八十一一点持っていました。しかし、ギリシャ語が分かる人は誰もいません。新渡戸もラテン語は勉強していますが、ギリシャ語は全然やっていません。ですから聖書の中にギリシャ語訳のもの、ラテン語訳のものはありません。

七、まとめ

新渡戸は幼い時に明治天皇から戴いた二円、今の価値で二万円位のお金で英語の聖書を買ってそれを読んで身に付けました。札幌農学校ではクラークが残していた聖書を貰って、それを基に討論し、信仰を磨き合った。アメリカに行つてクエーカーになり、少し聖書に対する考え方は変わりましたが、それでも聖書の大切なことは覚えて、以後も聖書を読みました。従つて、新渡戸が書く英語の文章には、聖書の引用とは言わずに、聖書を踏まえて表現されていることが随分あるということが分かつています。そして、死んだ後は聖書を含めて五千七百冊もの書物を東京女子大に寄贈しました。

十四歳の青年時代から一貫して聖書と共に生き、聖書を学び、最後はキリスト者として命を終えたということが言えます。

宣教師や牧師や伝道者は聖書を教えるのが仕事ですから、たくさん聖書を持つのは当然ですが、新渡戸はそれ以外の仕事にずっとついていたにもかかわらず、これだけ深く生涯を通して聖書に関わっていたということは、その人柄を良く表すものだと思います。

麻生首相の母親の父親は吉田茂ですが、吉田茂は死んだ後でカトリックになり、トマス・モアという洗礼名を受けました。トマス・モアというのは王様の言うことをきかず、斬首刑になったイギリス人で聖人になった人です（二四七八―一五三五）。首を切られても自分の信仰を曲げなかったという立派な人物です。吉田茂にすればお腹をくすぐられるような感じがするでしょう。麻生首相の父親は金持ちでしたから、彼は弱い人、力のない人、年とった人、困っている人などのことは眼中に無いでしょう。「年寄は働く以外に能力が無い」と言う人ですから。けれども、死んだ時はカトリックでお葬式をするでしょう。それを考えると、もつともつと本当に聖書を読む政治家が出てきて欲しい。そうでないと日本の国も民主主義が根付かないだろうと思います。

民主党の中にもクリスチャンがいるようですが、本当にそれが自分の政治活動に生かされているのかどうかは分かりません。

プロテスタントが日本に開教されて百五十年です。百五十年は長いようで割に短いです。イエスが亡くなったのは紀元三十年頃です。その後百数十年たつてようやく、新約聖書の中身をどれだけにしようかということがほぼ固まりかけましたが、まだしっかり固まっていませんでした。

とすれば、日本のキリスト教が百五十年経っているのになかなか伸びないと言い、プロテスタントの牧師も年々減る一方で信徒の数が伸びないと残念がっていますが、そのようなことは神様に任せておけば良いのです。信じる者同士が自分の信仰を生活に現わし、また、教えを伝える人は命がけで伝道する。伸びるか伸びないかは神様に任せておけば良いのです。数を気にするようではだめです。

ローマ時代では、国が反対し迫害までしたけれども、イエスが死んで三百年たちますと、キリスト教は公認され、国教になりました。国教になると墮落しますから国教にならない方が良いのですが、日本ではまだ百五十年です。もう駄

目だとか言うよりは、私たちの先人で聖書を重んじてことを成し遂げた人たちのことを常に心に置いて生きるのが一番良いのではないかと思います。